四一／一四二二―三八）と並んでこの王朝の第一世代を代表するスルターンであった。シリアにおける反亂の中から勢力を伸ばしスルターン在位中には、毎年のようにシリア方面への遠征を行うとともに様々な内政改革を行った。また、ペストが蔓延して社會不安が増大した時代でもあった。

これまでの諸研究に於ても、この時代のいくつかの特徴に就いては言及されてきたが、全體としての考察は、爲されていないようである。

本報告では、カイロにおいてムフタスィブ（市場監督官）の職務を自ら行なうとともに、また、この行政職にマムルークを任命したこと、またハナフィー派やスーフィーに對する優遇など後の時代に影響を與えた施策の時代背景について考察する。また、イブン・タグリービルディーを始めとする年代記の當該時代の敍述内容を比較してその特色を述べたい。

後期オスマン朝における イェニチェリ軍團上層部の昇進過程について

鈴木　董

中東のイスラム諸國家においては、軍隊の二元的構成が、特徴的に見い出される。すなわち、その軍隊は、君主と同民族出身の自由民からなる軍隊と、異民族出身の奴隷軍人からなる軍隊とから構成せられている場合が多い。オスマン朝においても、この二元性は、ムスリム・トルコ系の戰士達に淵源を有するティマール制軍隊と、キリスト教徒出身の改宗奴隷からなるカプクル軍團として見い出される。

カプクル軍團の中核をなすのは、歩兵軍團たるイェニチェリ軍團であった。イェニチェリ軍團は、オスマン史上、軍事的のみならず政治的にも極めて重要な要素であった。とりわけ、一六世紀後半以降の後期オスマン朝の政治過程においては、しばしば政治的に決定的な役割を果たした。

ここでは、この軍團の長官たるイェニチェリ・アースィを頂點とする軍團上層部の構成と昇進について、法令集成・政論書・年代記を主たる材料としつつ、檢討を加え、イェニチェリ軍團上層部の性格と、イェニチェリ軍團がオスマン朝の支配組織内の昇進過程全體の中に占めた位置を明らかにするとともに、イェニチェリ軍團の政治的意義の變遷の一端にも言及することとしたい。

清初における舊明朝の王府莊田

佐藤文俊

各地に分封され厖大な數値となった明の諸王の存立基盤は、明末農民反亂により一掃された。清朝は反清行動をとる朱氏を討滅し、「投誠」者は生存を保證すると共に、軍餉捻出の急務から明中期以降、王府・勳戚が集積した莫大な財産に注目した。王府莊田は「變價」・「租田」の二方法で處理されたが、特に前者に力點をおき民田

化（上價者――民田所有者）を推進したが多くの障害につきあたった。㋑明の賦役全書に勳戚・王府莊田の記載がなく、その全貌がつかめない。㋺明代の王莊は欽賜田と自置田に分類されるが、明中期以降の民田分割、投獻、置買等の方法による莊田擴大で土地所有權が錯綜したため、王田處理に當り糧・租兼收、變價銀の重複例まで出現。㋩「勢豪・衙蠹・悍將・驕兵・賊黨」による土地占有。清朝はこれらの障害の排除と全王田の把握、變價・租餉銀の徵收を考課・處罰の對象として官吏を督促した。

順治年代の右の結果を、康熙八年清朝は更名田令（既變價地及び未變價地の民田化）としてまとめ、翌九年には自置田の民田化方向を提示した。こうして明朝の掌握できなかった王莊が、清朝權力の賦役徵收體制下に編入（州縣管轄）された。しかし清中期以降まで殘る賦役全書内の土地區分「民田・屯田・更名田」の如く、完全な民田化まで多くの課題を内包していた。

『紅史』著作年次考

若松　寛

ツェルパ・クンガードルジェ（Tshal pa Kun dga' rdo rje）著『紅史』（*Deb ther dmar po* 又は *Hu lan deb ther*）は、稻葉正就・佐藤長兩氏によってその全文の譯注が發表されたことにより（『フゥラン・テプテル―チベット年代記』法藏館、一九六四年）、わが國では最もよく知られたチベット文史書の一つとなっている。

『紅史』の著作年次は、譯注者の見解によれば、「一三四六年であることに間違いない」（前掲書、一八頁）と斷定された。しかるに近年この見解を覆す『紅史』の異本が刊行された。この異本では、明らかに一三六三年までの記事が含まれているのである（『紅史〈藏文〉』東嘎・洛桑赤列校注、民族出版社、一九八一年）。洛桑赤列氏の指摘する如く、本書の「カルマ・カーギュ派史」の章にはカルマパ第四世ロルペードルジェ（Rol pai rdo rje）の事蹟が詳細に述べられているが、但しその記述は、彼が卯年（一三六三年）に中國内地からチベットへ歸還したことで打ち切られている。この記事が『紅史』全篇中、年代上最も新しいものなのである。

こうした事實に基づいて初めて『紅史』跋文中にみえる著作年次に關する問題の一句「至元二十三年に〔記す〕」に對して、一つの解決策を編み出すことができるというものである。卽ち、一三六三年は順帝の至正二十三年に當るから、原文の至元を至正の誤記とみなせばよいことになる。

この他、『紅史』に關する二、三の問題點を指摘してみたい。

勞工神聖の麵包
――民國八年秋、北京の思想狀況――

小野信爾

一九一九年の雙十節は、中華民國になって初めて大衆的に祝われた國慶であった。官側が例年以上に慶祝に冷淡であったのとは對照